

劉熙載尺牘研究

— 宋晉(雪翁)仁兄の倉場へ調任するに反対意見の陳述と兩姪、息子等の應試狀況報告を中心にして — (その一)

The Study of Liu Xizai's Letter

— Part1: A letter convincing Xu Wen not to accept the granary officer. and a letter on Lu's son's decision to take KAKYO (科擧) exam. —

撫古 小原 俊 樹 (美術教育講座書道分野)
鐵崖 相川 政 行 (東京學藝大學名譽教授)

(平成二十七年九月三十日受理)

一．序

宋晉への書簡は三通程確認されている。そのうちの一通は、「劉熙載尺牘研究—山西・太谷仁村から雪翁(宋晉) 仁兄親家大人に與えた手書を中心にして—(その二)」(福岡教育大學紀要 第61號第五分冊 平成二十四年二月)、「同題(その二)」(同紀要 第62號第五分冊 平成二十五年二月)、「同題(その三・完)」(同紀要 第63號第五分冊 平成二十六年二月) — 以下『宋晉A』(その一、その二、その三とする。)として既に發表した。今回はその二通目である。内容は副題が示す様に、前半は宋晉の倉場(穀倉監督所)へ轉任するに、

熙載の反対意見が切々と述べられたものである。

ほゞ第一・二箋を用いてそれを説いている。第二箋の最終部分からは宋晉の息子・姪、二人の試験(科擧)の事に觸れ、自分の息子のそれにも及んでいる。更に金錢のやり取り、送金の件に及んで、當時の送金事情の一端がこれにて知る事が出来る。また、宋晉の實弟叔元の様子にも及んでいる。再度自身の長男・次男の試験の様子や、その學習狀況を、郷里(興化)からの報告を受けての知らせとして、宋晉に傳えている。また、現状の自身の經營する塾での弟子の試験合格者の氏名を舉げて、その近況報告を手際よく報告した内容になっている。

書簡の字風は宋晉が倉場侍郎（官職名）へ轉任する年次が、その傳「清史稿」〔下段参照〕から判るので、劉熙載四九歳時の筆蹟となる。前研究の筆蹟「宋晉A」〔その二〕圖版一・二・三・四―が、やや楷書に近い眞行となっているのに對し、これは少し書き流した様子が判り、行楷と言えようか。又、用箋の色はややピンクと黄色（長年の保存状況から少し原色から變色している可能性がある）のもので、縦野のある八行信箋を用いたものである。その書は、まだ年齢からも老熟したものではなく、堅い楷書筆法をともなったものである。同年（科擧及第同年）ではあったが、宋晉は劉熙載よりも長年で、自分の實姉の夫にも當たるいわば親家で、人生の先輩格でもあった。それに宛てた筆蹟は極めて丁寧さが窺えるものである。本研究は、次の項目をもつて論考していく。

但し、紙幅の關係で、本號は尺牘剖析 ⑥語釋考迄とし、三、尺牘考察以下は、（その二）として次號で論述していく。

二、尺牘剖析

①圖版

〈圖版一〉劉熙載尺牘第一箋 〈圖版二〉劉熙載尺牘第二箋

〈圖版三〉劉熙載尺牘第三箋 〈圖版四〉劉熙載尺牘第四箋

②釋文（第一・二・三・四箋）（以下次號）

③現代中文讀（拼音） 三、尺牘考察

④訓讀 四、書式・書法分析

⑤現代語譯 五、結論

⑥語釋考（以上本號） 六、註及び参考文献

◇參考 趙爾巽主編『清史稿』卷四百二十二、宋晉傳（中華書局刊行標點本による）

宋晉，字錫蕃，江蘇溧陽人。道光二十四年進士，選庶吉士，授編修。二十七年，大考二等，擢中允。二十九年，典河南鄉試，因命題錯誤議處，論不得更與考試差。咸豐二年，大考二等，擢侍讀學士，遷光祿寺卿。三年，命會辦京城團防保甲，署禮部侍郎。四年正月，疏言：「去冬團丘大祭，適值聖體違和，禮臣以登降繁縟，於親詣壇位及奠帛後諸儀節，更加酌定，奏請允行，旋以遣親王恭代而止。惟詳稽典禮，祀天鉅典，尤爲慎重。偶遇服色不宜，興居未適，有違代，無議減。現值祈年大祀，伏願皇上飭停新議，仍遵成憲。」五年，遷宗人府丞。

六年，疏言：「自江寧失陷，上自九江，下及鎮江、瓜洲，寇勢水陸相援。現聞向榮兵力不支，情形危急，今即分路赴援，仍恐緩不濟事。請飭江督、浙撫，雇用輪船載兵，由圖山關入江，焚攻金、焦賊船。再由儀徵溯浦口，與六合諸軍相爲犄角，則江寧、鎮江對岸之賊，節節防我，必不敢離巢東竄。是不特解江南之急，即江北亦愈寧謐。又聞廣東新至紅單船二十餘艘，請飭德興阿、向榮將紅單船併歸一處，力扼燕湖江面。如能克復燕湖，則拊賊之背，寧國不攻自下。」薦道員繆梓、楊裕深、金安清通達治體，洞悉吏情，請以雇船籌費諸事責成辦理。疏上，諭兩江總督怡良與向榮、德興阿酌行。

宣宗實錄告成，敘勞，擢內閣學士，迭署戶、工二部侍郎。八年，授工部侍郎。文宗顯皇帝抱病，未能親行祀典，十年，晉疏言：「近年郊壇大祀，聖躬以步履失常，偶緩親行，而於遣恭代外，仍先期躬詣皇乾殿拈香，仰見寅畏深衷。惟每屆大祀，皇上於前一日辰巳間躬詣拈香，即在齋宮祇宿。今則先期即如臨事，請於前一日寅卯間先行詣殿拈香，然後還宮辦事。臣尤願慎攝聖躬，養元氣，節峻伐之味，復健行之常，於下屆郊祀大典照常親行。」上嘉納之。

十一年，疏言：「江寧失陷已將十載，總督曾國藩經營防剿，與官文、胡林翼會合攻復安徽，惟所部不足二萬人。若合四川、湖北、湖南、江西、安徽五省歲入，養兵勇十三萬人，以七萬分駐防剿，六萬大舉東征，餉足兵增，庶可一舉集事。」又言：「江西首當賊衝，巡撫毓科、布政使慶善皆失人望，請以太常寺卿左宗棠簡署巡撫，而於督糧道李恒、前廣饒道沈葆楨、浙江道員史致謬三人中簡擇擢授藩司。」又請以曾國藩總統四川、湖北、湖南、江西、安徽五省督辦東征軍務。上以所籌不爲無見，下官文、國藩等議奏。又疏言：「慕陵規制，儉約樸實，萬世可法。定陵工程請仿行勿改。」格於部議，不行。

同治元年，調倉場侍郎。南漕初改海運，歲額三百萬石，自天津運京倉，偷漏飛灑，歲損米萬石。追軍興，江、浙郡邑淪陷，南漕起運纔二十餘萬石，而偷漏飛灑如故。十年以來，侍郎及監督官凡數易。晉受事，深悉其弊，因循未奏。六年，事發，左遷內閣學士，償米二萬石。十二年，遷戶部侍郎。十三年，卒。

二、尺牘剖析

① 圖版

圖版一 劉熙載尺牘第一箋

雪翁仁兄親家羊上人 閣下前八月初有字清
安想已達矣 弟有弟家信及
銀兩統寄奉此 甚惟
老兄大人興居佳勝為快前信已為弟所知
老兄調任倉場 弟 於昔者嘗謂此官難做矣有一盡老翁曾
派稽查之事直云此官定不可為歷潮前此為人其不
可乃者自見大抵毛病難以枚舉只早告假為尚 弟 聞說此
狀置而深論 此等官稱兄德
大抵是誠切意 惟希承 賜書言及近來精力
稍遜於前將欲乞假是乞假之意在先原問所管之事

之難為難易也亦何妨且乞乎且非自擇其為而以難者歟
天下事有願為有不願為不願為者不妨聽願為者為之
弟昔年獻所聞亦以

若兄有前此之言知非願為者也至

為朋之酌又必超之元著而如本所云殊不為以當一

哂也 兩姪試事何如念弟昨先收到家信一封乃由官封而

來
舍下
幸甚託

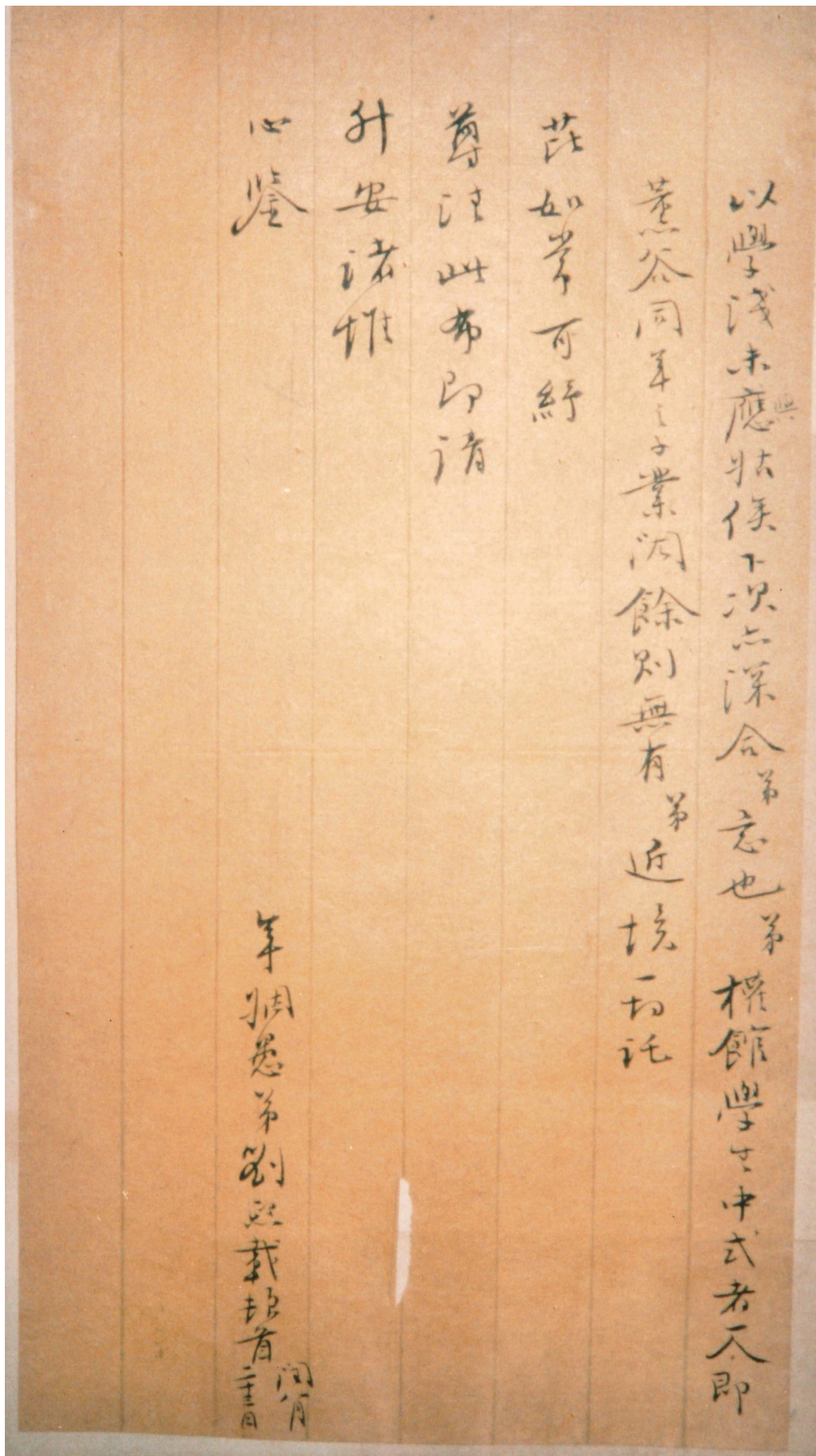
此書為平順家中收到之信係弟
去歲十一月最收到銀叁拾壹

(5)

—宋晉(雪翁)仁兄の倉場へ調任するに反対意見の陳述と兩姪、息子等の應試狀況報告を中心にして— (その一)

兩係金府所會已送至今春信與銀猶未及收也前承
示復顏代寄抄為利便復顏係熟人弟一時竟不能記矣前八月寄家
書捌拾兩餘京中大元信局脚費代寄未知信局承任否種
費兩姪心處自猶瑣甚也茂姪官江右有信來否
老嫂居邑近河一帶俱為安謐也叔元親家現
為甘泉縣捐妻父四月聞已取卷系信并有家信在內未知到
否大兄今年雖未入都興試據云現為用功耳聞次兄視從前頗
有長進弟已大責過望興試與否特其餘事興邑八月錄試次兄

〔圖版四〕 劉熙載尺牘第四箋



② 釋文

第一箋

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27

A 雪翁仁兄親家年大人 閣下前八月初五日有字。請

B 安想已達矣。
并有弟家信及
銀兩統寄奉託 茲惟

C 老兄士人興居住勝爲頌。前信已發後乃知

D 老兄調任倉場弟於昔者嘗聞此官之難做矣。有一孟老翁曾

E 派稽查之事、直云此官定不可爲、歷潮前此爲之之人其不

F 可爲者自見。大抵毛病難以枚舉、只早告假爲尚弟聞此說亦

G 姑置勿深論
此翁嘗稱 兄德
大抵是誠切意 惟前承 賜書言及近來精力

H 稍遊、於前將欲乞假是乞假之意在先。原不問所管之事

第二箋

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28

I 之難易。雖易也。亦何妨且乞乎。且非自擇其易而以難者貽人

J 天下事有願爲有不願爲、不願爲者不妨聽願爲者爲之。

K 弟茲率獻所聞亦以

L 老兄有前此之言。知非願爲者也。至

M 高明之酌又必超、元箸、而如右所云。殊不足以當一

N 哂也。兩姪試事何如念々。弟昨竟收到家信一封乃由官封而

O 來舍下壹是託

P 此、尚屬平順。家中收到之信係弟去歲十一月發、收到銀參拾壹

第二箋

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27

Q 両。係金府所會 玄冬 至。今春之信與銀、猶未及收也。前承
已送

R 示筱韻代寄。筱韻係熟人否第一時竟不能記矣。前八月寄家
但爲段刺史否亦未收得

S 之捌拾兩欲給京中天元信局脚費代寄。未知信局承任否。種々

T 費 兩姪心處自嫌瑣甚也。茂之姪之官江右有信來否。

U 老嫂居敝邑。近聞裡下河一帶俱尚安謐也。叔元親家現

V 爲甘泉釐捐委員聞已有發京之信并有弟家信在內未知知
四月

W 否。大兒今年雖未入都與試據云現尚用功。并聞次兒視從前頗

X 有長進。弟已大喜過望、與試與否。特其餘事。興邑八月縣試次兒

第四箋

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29

Y 以學淺未應姑俟。下次亦深合。弟意也。弟權館學生中式者一人即
興

Z 薰谷同年之子業閎餘則無有。弟近境一切託

a 茈如常。可紓

b 尊注此布。即請

c 升安。諸惟

d 心鑒

年姻愚弟劉熙載頓首 閏八月 二十三日

(數字は必ずしも各行の段と一致しない場合がある。本文には句讀点がなく、これを入れ
たからである。空格を含めて數える)

劉熙載尺牘研究

(9) 一宋晉(雪翁)仁兄的倉場へ調任するに反對意見の陳述と兩姪、息子等の應試狀況報告を中心にして一 (その一)

第一箋

Xuě wēng rén xiōng qīn jiā nián dà rén gé xià Qián bā yuè chū wǔ rì yǒu zì Qǐng
雪翁仁兄親家年大人閣下。前八月初五日有字。請

Bìng yǒu dì jiā xìn jí

ān xiǎng yǐ dá yǐ bìng yǒu dì jiā xìn jí Zī Wéi
安想已達矣。并有弟家信及茲惟

Yín liǎng tǒng jì fèng tuō
銀兩統寄奉託

Lǎo xiōng dà rén xīng jū jiā shèng wéi sòng Qián xìn yǐ fā hòu nǎi zhī
老兄士人興居佳勝爲頌。前信已發後乃知

Lǎo xiōng diào rèn cāng chǎng dì yú xī zhě cháng wén Cǐ guān zhī nán zuò yǐ Yǒu yī Mèng lǎo wēng Céng
老兄調任倉場弟於昔者嘗聞、此官之難做矣。有一孟老翁、曾

pài jī chá zhī shì zhí yún cǐ guān dìng bù kě wéi lì cháo qián cǐ wéi zhī zhī rén qí bú
派稽查之事、直云此官定不可爲、歷潮前此爲之之人其不

kě wéi zhě zì jiàn Dà dī máo bìng nán yǐ méi jǔ zhǐ zǎo gào jià wéi shàng Dì wén cǐ shuō yì
可爲者自見。大抵毛病難以枚舉、只早告假爲尚。弟聞此說亦

Cǐ wēng cháng chēng xiōng dé
此翁嘗稱兄德

gū zhì wù shēn lùn
姑置勿深論

dà dī shì chéng qiè yì
大抵是誠切意

Wéi qián chéng cì shū yán jí jìn lái jīng lì
惟前承賜書言及近來精力

shāo yóu yú qián jiāng yù qǐ jià shì qǐ jià zhī yì zài xiān Yuán bù wèn suǒ guǎn zhī shì
稍遊、於前將欲乞假是乞假之意在先。原不問所管之事

第二箋

zhī nán yì Suī yì yě Yì hé háo qiě qí hū Qiě fēi zì zé qí yì ér yǐ nán zhě yí rén
之難易。雖易也。亦何妨且乞乎。且非自擇其易而以難者貽人

tiān xià shì yǒu yuàn wèi yǒu bù yuàn wèi bù yuàn wèi zhě bù fáng tīng yuàn wèi zhě wèi zhī
天下事有願爲有不願爲、不願爲者不妨聽願爲者爲之。

Dì zī shuài xiàn chū wén yì yǐ
弟茲率獻所聞亦以

Lǎo xiōng yǒu qián cì zhī yán Zhī fēi yuàn wèi zhě yě Zhì
老兄有前此之言。知非願爲者也。至

gāo míng zhī zhuó yòu bì chāo chāo yuán zhù ér rú yǒu suǒ yún Shū bù zú yǐ dāng yī
高明之酌又必超々元箸、而如右所云。殊不足以當一

shěn yě Liǎng zhī shì shì hé rú niàn niàn Dì zuó jìng shōu dào jiā xìn yī fēng nǎi yóu guān fēng ér
哂也。兩姪試事何如念々。弟昨竟收到家信一封乃由官封而

lái shè xià yī shì tuō
來舍下壹是託

bì xiàng shǔ píng shùn jiā zhōng shōu dào zhī xìn xì dì qù suì shí yī yuè fā shōu dào yín cān shí yī
茈、尚屬平順、家中收到之信系弟去歲十一月發、收到銀參拾壹

shí yī
拾壹

第三箋

Qù dōng
 liǎng Xì jīn fǔ suǒ huì 去冬 zhì Jīn chūn zhī xìn yǔ yín yóu wèi jí shōu yě Qián chéng
 兩。系金府所會 yǐ sòng 至。今春之信與銀、猶未及收也。前承
 已送

Dàn wèi jiǎ cì shǐ fǒu yì wèi shōu dé
 但 爲 段 刺 史 否 亦 未 收 得
 shì Xiǎo Yùn dài jì Xiǎo yùn xì shú rén fǒu dì yī shí jìng bù néng jì yǐ Qián bā yuè jì jiā
 示 筱 韻 代 寄。 筱 韻 係 熟 人 否 第 一 時 竟 不 能 記 矣。 前 八 月 寄 家
 zhī bā shí liǎng yù gěi jīng zhōng Tiān yuán xìn jú jiǎo fèi dài jì Wèi zhī xìn jú chéng rèn fǒu Zhǒng zhǒng
 之 捌 拾 兩 欲 給 京 中 天 元 信 局 脚 費 代 寄。 未 知 信 局 承 任 否。 種 々
 fèi liǎng zhī xīn chǔ zì xián suǒ shèn yě Mào zhī zhī zhī guān Jiāng yòu xìn yǒu lái fǒu
 費 兩 姪 心 處 自 嫌 瑣 甚 也。 茂 之 姪 之 官 江 右 信 有 來 否
 Lǎo sǎo jū bì yì Jìn wén lǐ xià hé yī dài jù shàng ān mì yě Shū yuán qīn jiā xiàn
 老 嫂 居 敝 邑。 近 聞 裡 下 河 一 帶 俱 尚 安 謐 也。 叔 元 親 家、 現

wèi gān quán lí juān wéi yuán wén sì yuè yǐ yǒu fā jīng zhī xìn bìng yǒu dì jiā lìn zài nèi wèi zhī dào
 爲 甘 泉 釐 捐 委 員 聞 四 月 已 有 發 京 之 信 并 有 弟 家 信 在 內 未 知 到
 fǒu Dà ér jīn nián suī wèi rù dōu yǔ shì jù yún xiàn shàng yòng gōng bìng wén cì ér shì cóng qián pō
 否。 大 兒 今 年 雖 未 入 都 與 試 據 云 現 尚 用 功、 并 聞 次 兒 視 從 前 頗
 yǒu cháng jìn Dì yǐ dà xī guò wàng yǔ shì yǔ fǒu Tè qí yú shì Xīng yì bā yuè xiàn shì cì ér
 有 長 進。 弟 已 大 喜 過 望、 與 試 與 否。 特 其 餘 事。 興 邑 八 月 縣 試 次 兒

第四箋

Xīng
 興
 yǐ xué qiǎn wèi yīng gū sì Xià cì yì shēn hé Dì yì yě Dì Quán guǎn xué shēng zhōng shì zhě yī rén jí
 以 學 淺 未 應 姑 俟。 下 次 亦 深 合。 弟 意 也。 弟 權 館 學 生 中 式 者 一 人 即
 Xūn gǔ tóng nián zhī zǐ Yè hóng yú zé wú yǒu dì jìn jìng yī qiè tuō
 薰 谷 同 年 之 子 業 閎 餘 則 無 有 弟 近 境 一 切 託
 bì rú cháng kě shū
 芑、 如 常 可 紓
 zūn zhù cǐ bù jí qǐng
 尊 注 此 布。 即 請
 shēng ān Qīng wéi
 升 安。 請 惟
 xīn jiàn Nián yīn yú dì Liú Zī zài dùn shǒu rùn bā yuè
 心 鑒 年 姻 愚 弟 劉 熙 載 頓 首 閏 八 月
 èr shí wǔ rì
 二 十 五 日

④ 訓讀

第一箋

雪翁仁兄、親家、年大人閣下へ。前に八月初五日に字有り請

安。已に達するを想へり。併せ、弟の家信及び銀兩統寄し、託し奉れり。慈に惟う

老兄大人興居佳勝をもつて頌と爲す。前信、已に發するの後、乃ち、

老兄の倉場への調任を知る。弟は昔において嘗此の官の難做を聞けり。一孟老翁有り、曾て

稽查の事に派せられ。直ちに云えり。「此の官は定めて爲すべからず。歷潮(朝の誤りか)此れ之を爲すの人、其の

爲すべからざるは自ずから見われる。大抵の毛病の以て枚舉し難し」と、只だ早く假を告げるは尚たり。弟此の説を聞くも亦

姑は置き深く論ずるなし。此の翁は嘗て兄の徳を稱え、大抵是れ誠切の意なり。惟だ前に承賜りし書は近來の精力、

稍遊れるに言及せり。前において、まさに假を乞わんとす。是れ假を乞うの意、先に在り。原に所官の事

第二箋

の難易を問わず。易きと雖またも亦何ぞ妨げを且つ乞わん乎。且つ自ずから其の易きを選びて難ずるものをもつて人に貽すにあらず。

天下の事には願爲有り。願爲せざる有り。願爲せざる者は聴くを妨げず。爲すを聴く者は之を爲せり。

弟茲に率い、聞く所を獻するも亦、

老兄には、前に此の言有るをもつて、願爲に非ざる者を知れり。

高明の酌に至り、又必ず超々元箸にして、しかして云う所右の如し。殊に足らざるは以てまさに

一晒すべし。兩姪の試事は何如。念々す。弟昨、竟に家信一封收到せり、乃ち官封より

舎下に來る壹是託此し、

尚ほ平順に属せりと。家中收到の信は弟の去歲、十一月に發するに係われり。銀參拾壹

第三箋

兩を收到す。金府の所會去冬已に送る。至り。今春の信と銀は猶ほいまだ收するに及ばざるがごときなり。前に
 筱韻承示代寄す。(但し、爲段一人名?一刺史は否や、亦いまだ收得せず) 筱韻は熟人に係わるや否や。弟の一時、竟に記すあたわず。前八月、家に寄する
 の捌拾兩は京中の天元信局の脚費代寄に給んと欲す。いまだ信局の承任否やを知らず。種々の
 費、 兩姪の心處自ずから嫌瑣甚だしき也。 茂之姪の官江には信の來たる有りや否や。
 老嫂の敝邑に居る。近くは裡下の河一帯は俱に尚ほ安謐なるを聞くなり。 叔元親家現に
 甘泉の釐損委員なり。聞けり、四月、已に京を發するの信有り、并せて有り、弟の家信内に在り、いまだ到らざるを知らざれば則ち
 否や。大兄今年いまだ都に入らざると雖も、試を與ち據て云う、現に尚ほ功を用いたりと并せ聞けり。次兄視るに前従りは頗ぶる
 長進有りと。弟の已に大喜し望に過ぐ、試を與つは與るか否や。特に其れ餘事なり。興邑の八月縣試、次兄は

第四箋

學の淺を以ていまだ應ぜず。姑く俟り。下次も亦深く合す。弟の意なり。弟の權館の學生、式に中りたる者一人。即ち
 薰谷同年の子、業閑にして、餘は則ち有る無し。弟の近境一切託
 芘。常の如く紓べし。
 尊注此れ布く。即ち請う
 升安。諸惟
 心鑒。

年姻の愚弟劉熙載頓首
 閏八月
 二十三日

⑤ 現代語譯

雪翁仁兄・親家・年大人・閣下殿

前八月五日にお手紙を出しましたが、まもなく着信するでしょう。同封に小弟の家書と銀兩統もお願い致しました。

ご健勝を申し上げます。前に書翰を出しました後に、老兄が倉場に轉動した事を知りました。小弟が昔からよく聞いていた話では、この官職がなかなかやりにくいものと……。或る一人の孟老翁という人は、「倉場の稽查(取り調べ)の職に派遣された事があるが、その後、正直に——この官はやるべきでない——」と言っていました。昔よりずっと今日迄、この官についての人の事をよく見れば、その「やるべきでない」と言っていた事はよく分かるはずです。その欠点を挙げ盡くせないが、ともかくいち早く休んで良いと思います。小弟はこの話を聞いて、しばらくの間、問題にしています。その孟老翁はいつも兄の人柄を褒めていますから、言われた話は大抵誠意もありましよう。但し、この前、頂いたお手紙には「最近精神が少々衰えてきているから、休んでもよいだろう」と書かれてありました。この休んでもよいという意味は兄にとって、本来、所管する——以上、第一箋——ことの難易とは関係ないので、やりやすくてそうすればいいと思います。しかも、これは自分で容易さを選んで、他人に困難を任せる事ではないからです。天下の事はやりたがる者も居れば、やりたがらない者もいるので、やりたがらない方は、やりたがる者に任せれば良い。以上、小弟が知っている限りの事を申し上げます。老兄は「やりたくない」と言ってこられたからです。けれども、御高明なお考えは、又妙言でもあり必ず普通の考えを超えるはずであるから、右のように言ったのは餘計な事かも知れませんが、お氣にせず笑って收めてください。

お二人の息子の試験の事はどうなったのか、心配です。昨日は官封より手紙が来ました。お陰で、我が家は無事だったと言う。向こうに着いた手紙は去年十一月に私が出したものであった。銀參拾壹兩は——以上、第二箋——

金府——(この本文一部分未詳)より去年冬頃届きました。今年春の手信と銀はまだ着いていないようです。この前、筱韻(しょういん。人名)に頼んで届けるところ(爲段刺史はどうかいまだ收得しません)が、筱韻という人は知っているかどうか、一時に思い出せなかった。

前八月送る捌(八)拾兩は京中の天元信局に手数料を出して運送を任せたいと思いました。信局は承けてくれるかどうか判りません。いろいろ費用など兩姪の心は瑣事を嫌う事甚しきものでありましようか。姪の茂之は官は江に任官してからよく手紙をくれますか。老嫂(夫人)が我がふる里におられますが、最近、故郷(興化)の邊りは安全だと聞いております。叔元(宋晉の實弟)親家は現在の甘泉(陝西省北部洛河流域か)の釐捐(稅務署)委員を務めたという。四月中、北京へ手紙がもうそろそろ届く途中と聞きましたが、その中に小弟の手紙も入れましたが、今のその状況が分かりません。小弟の大兄(長男)は今年、北京に入試に行かなかったが、只今、良く勉強していると聞いています。次兄(次男)も以前より良く頑張っていると言う。入試は行くか行かぬかは別にして、それだけを聞いて小弟にとって、大いに喜ぶのは言う迄ありません。興邑(興化)の八月の縣試に、——以上、第三箋——

次男は學力不足のため、行かなかったが、次の試験を待つ意見も小弟と一致します。私の塾の弟子の合格者の中の一人は、薰合同年の子供、業園(ぎょうこう)と言います。他に知人の子供はいません。お陰で小弟の近況は無事であり、御安心ください。この手紙より大安を謹んで思い、どうぞ惠鑒下さいませ。

親族關係にある愚弟劉熙載より

閏八月二十五日

——以上、第四箋——

⑥ 語釋考

○ 雪翁＝宋晉の事。先方の字又は別稱を用いるもので、自分の下位でない限り、實名を書かないのが、この時代のしきたりである。文中は老兄大人等を用いている。宋晉については『宋晉A』（その一）の二六頁で概述した。書室名は「水流雲在館」で、著に『水流雲在館奏議詩集』^{註①}がある。劉師の書簡にしばしば出てくる介弟の叔元がその詩集を編纂した。俞曲園が「宋雪帆侍郎詩序」（次次頁下段参考）を書いている。詩集中には劉熙載に關する賡酬等の詩は見当たらない。

顯官としてその任務は多忙を極めたであろうが、そこは進士出身者であり、文人的詩情もそなえていた。その一例を挙げると、

過^二東坡先生洗研遺跡^一

飛語傷人最不平 崖州遠謫歎^二浮生^一

劇憐洗硯歸來日 猶有文章感^二聖明^一

である。

○ 銀＝清朝末の貨幣は銀貨等が主流であった。どういう金融流通かは未詳。尚、『清朝錢譜』^{註②}等では順治→雍正。乾隆→道光。咸豐→光緒とその錢型、錢銘等がかなり變化している。時に表裏に滿文、漢字が鑄込まれたものである。これは滿州人の統治であった清朝のこと故當然であった。しかし、晩清になると、銀貨の様子も一變してくるものがあつた。^{註③}

○ 興居佳勝爲頌＝尺牘用語、起居語。興居はおきふし。起居。興寢。爲頌は御祝い申し上げる。爲は…となす。…と思う意から奉賀候。爲頌は諸橋轍次『大漢和辭典』ではWei Song を時文の原音（漢語拼音に換える以下同）を擧げるのみである。イシヨウと音讀するか、な

じまないが「頌を爲（な）す」と訓讀も出來ようか。

○ 調任倉場＝轉職、人事異動を調任と言った。現代語でも轉職を調任、調動と言う。調は遷任する。うつる。うつす。調字は『書經』等にも見える語ではある。倉場の職は穀物等を管理する場所。船倉、運搬等も含む。宋晉は同治元年にその侍郎（官職）につく。その後の顛末は『清史稿』卷四百二十二「宋晉」に次の様に記す。

同治元年、調倉場侍郎。南漕初改海運、歲額三百萬石、自天津運京倉、偷漏飛灑、歲損米蒸鉅。迨軍興、江、浙郡邑淪陷、南漕起運纔二十餘萬石、而偷漏飛灑如故。十年以來、侍郎及監督官凡數易。晉受事、深悉其弊、因循未奏舉。六年、事發、左遷內閣學士、償米二萬石。十二年、遷戶部侍郎。十三年、卒。

○ 難做＝做は作の俗字。おこす。振興す。なす。行う。そのことがなし難い。これも『大漢和辭典』ではnán tsuo(zuo)と原音のみ。「なんさ」と訓讀した。

○ 稽查＝ケイサ。考えて取り調べる。調査。南方から大運河を經由して穀物が京師に運ばれる。この間、天津にここから都に運搬される。この間各地の港や中繼地でそれらが汚職や盜難に遇い、京師に着いた時にはほとんど慘憺たる害を受けての結果で、これらを管理、調査に携わる役人は重責任を負わされる事になる。これは歴代、清朝の王朝變わらなかつた様であった。人のよき義兄にこの任に當らすことを強く心配する劉熙載は早く休暇を取り、この職から離れることを主張している。

○ 歷潮＝潮は朝の誤か。さすれば歷朝は代々の朝廷。代々の王朝、天子となる。

○ 毛病＝毛の悪いくせ。くせ。きず。欠点。

○ 假＝仮の舊字體。ひま。いとま、暇に通ずる。休暇。

○ 弟茲率獻^レ弟は義弟ともなる劉熙載。率はしたがう。おおむね、にわか等の意。獻はその聞き及んだ意見等を献上する。

○ 高明之酌^レ高明は見識が高く知恵が明らかな事。又、人に對する敬稱。あなた様。酌は考え。酌量。くみはかること。くみとること。高明な方のお考え。

○ 元箸^レ元は玄に、箸は著に通ずる。玄著ケンチヨは、言論の妙を言う。『晋書、王戒傳』に「王戒談^二子房季札之間^一、超然玄箸^二とある。

○ 一晒^レ音はシン。わらう。ほほえむ。あざわらう。そしり笑う。他に、嗤、矧、噱、哈、听、莞等あるがそれぞれ意に異同がある。

○ 筱韻^レ人名か。筱は篠に通ず。未詳。

○ 兩姪^レ宋晉には正室陳夫人に一人、窳室^{しやう}の劉夫人(劉師の姉)には二人の計三人の子供が居た。茂之はその一人でしばしば劉氏の尺牘にその名が出される。劉夫人の子供であろうか。

○ 承任^レCheng-jen。引受け。任務を引受ける。先の爲頌^ふの様に『大漢和辭典』では、拼音をつけるのみである。訓讀では「しようにん」とした。

○ 老嫂敝邑^レ宋晉に嫁した姉と思われる。宋晉の貫籍は江蘇省溧陽^{りつやう}(省の西南部にあつて、安徽省に接する)である。當時は太平天國の亂のただ中であつた様だ。敝邑は自己の邑里の謙辭(郷里、揚州府興化)、ここに避難していたことが考えられる。下文の安謐はこの亂がこの地域一帯ではおさまっていることを意味している。

○ 叔元親家^レ宋晉の實弟。劉氏は他信においても、この人物の動靜を氣にしている。宋晉の先の詩集中に兄と叔元とのやりとりの應酬の詩が二、三見られる。儒學であり、兄弟愛があつた。その一例を以

下に挙げる。尚、介弟とは他人の弟を言う。大弟とも。

得舍弟叔元書卻寄
水流雲在館詩鈔 卷四 七 胸陽集
尚有高堂在飢軀作遠遊牽裾頻涕淚垂豪漫羈留海近
涼生夏金銷酒種愁白雲遙可指仁望幾登樓
見說親顏好微病已漸平者番書送喜昨夜夢猶驚也^{記實}
鳩杖棲遲景鵠原躑躅情青衫塵末滌何日博微名

東京大学東洋文化研究所
所蔵本による。

○ 甘泉^レ地名。中國によく見られる地名である。叔元の赴任した地名であるが、どこか確定しがたい。一應、陝西省北部の洛河流域の甘

泉が考えられる。他に、江蘇省江都等も考えられるが・・・未詳。

○ 釐捐^レ釐はおさむ。音はり。捐はエン、臨時税。附加税。釐金税は清代咸豐以後に行われた一種の國內關稅。その役人に叔元がなつた。

○ 大兒・次兒^レ劉氏の息子・長子。劉彝程(一八三六―一九一〇?)字省庵。成人後は數學者として活躍した。『簡易庵算稿』の編者がある。次男は展程である。俞樾の「左春坊左中允劉君墓碑」^注に「娶宗氏、以君官、生封宜人、先卒。大夫子三、彝程國學生。展程光緒元年恩科舉人。尊程縣學生。女子二、云々」とある。三子は親の様に殿試まで應試出來ず、郷試や會試までであつた様だ。恩科は正科に對する。舉人は郷試に授けられた。劉氏は自身の様に殿試及第まで、我が子の教育を並々ならぬ考えていた事がよみ取れる。尚、三子共に劉師の説文音韻研究『四音定切』^注の參校に關わっている。

○ 與試^レ與選と同じ。試(選)にあずかる。さしくわゝる。『易・雜卦』に「或與或求」とあり、その注に「我を以て物に臨む、故に與ると曰ふ」とある。

- 興否 〓 この興の意味はあずかる（参加する）か、そうでないか。
- 興邑 〓 劉氏の貫籍、興化。この地方で應試したので縣試、郷試という。この郷試に及第し、舉人等になり、會試、殿試に及ぶ。科擧の出發點である。姪や子供の應試には強い關心を抱くが、以下の文中子息の學力に應じ本人にまかせる様子も窺える。劉師はまさに教育者で、我が子に對し本人の自立心を考えての故、あまり干渉がましくはなかった。
- 權館 〓 館は學舍。寓舍。貴賓の宿泊する官舍。權は假攝。かりに他の官職を兼ねる意。この寓舍で、私塾的に應擧者への教育を施していた事が、ここから窺える。
- 中式 〓 式は科擧の法制。中は及第すること。自分の經營する館（私塾）で教えた弟子が試に及第した事。
- 薰谷同年 〓 薰谷は人名。未詳。同年は劉氏と殿試等の及第年次が同じであることを意味する。宋晉も同年であった。三人は道光二四年（一八四四）甲辰殿試及第者。進士となった。彼等には年齢にかかわらず、氣の合った者同士の特別な關係が出来、親しい交流が晩年迄續いたようである。
- 業閔 〓 薰谷の息子。及第者の一人。劉師の弟子の一人。
- 託庇 〓 庇は庇に通ずる。託庇。御蔭様で。
- 諸惟は、伏惟（謹んで思うに、又ひそかに考えるに。伏以とも）語で、先方に求め、願ひ請ふの意を表わす。
- 心鑑 〓 鑒察語で、先方の閱視を言うもので、伏惟語の次に置かれる。劉熙載は心鑒のほか、惠鑒、垂鑒等を他信で用いている。

（以下次號）

宋雪帆侍郎於余爲同館前輩在京師時曾以後進禮見然未與相習也及同治初公奉

命至天津驗收南漕時江浙淪陷余避地居津遂與時相往還相得甚歡余方著羣經平議未卒業公取一二卷觀之歎曰此不朽盛事也宜早刻之若刻成行世雖萬戶侯不足道矣余遜謝不敢當然其年卽以三代世室重屋明堂考刻之津門由公一言發之也嗣後所著各書次第告成亦次第付梓流布人間旁及海外頗不虛公期望之意而公不及見矣戊辰以來余主講浙中詁經精舍兼筦書局而公之介弟叔元觀察實奉檄提調局事亦與余相得甚歡觀察之子澄之明經又執贄於余門下工詩文通小

水流雲在館詩鈔

序

一

學兼精楷法昌黎所謂稱其家兒者也今年春余來湖上觀察以所刻公之遺詩曰水流雲在館詩鈔者見示詩凡六卷釐爲八集其前五集皆未通籍前作後三集則通籍後詩也公詩抒寫性靈自諧聲律都門與陶鳧香張詩舲潘星齋李小湖諸先生唱和惜不自收拾兵燹後零落無存觀察於京好諸親故中網羅放失僅得詩五百餘篇然讀其詩知其爲人固卓然道咸間名臣矣末有追憶先塋詩八首始知公家素清寒自祖以下其境皆奇窘而積累之厚則有人所不能及者宜乎受其遐福蔚爲鼎門也公之詩讀者皆知其美不待余言而余追維在津門時相與周旋之雅微名所自至今不忘故因觀察之屬而僭爲之序旣以慰觀察鶴原之誼兼舉公詩令名須永念之句爲澄之助之也

光緒十有三年莫春三月館侍生俞樾書於西湖寓樓